

西之表市納曾遺跡

1977. 3

西之表市立博物館

西之表市納曾遺跡

I 序 説

1. 遺跡の環境

種子島は、北々東から南々西にのびている延長5.2キロメートル、幅1.2キロメートル、最も狭い部分で6キロメートルの細長い島である。

全島低平な丘陵からなり、中部の十三番部落西方、標高282.3メートルの山を最高とする。相当開拓された数段の更新世海岸段丘が全島に発達するほか、海岸には標高10～20メートルの沖積世海岸段丘がきれいに島をとりまわっている。

西海岸と東海岸とはやや景観が異なり、太平洋の巨浪に洗われる東海岸は岩石が多い。

西海岸は砂浜がよく発達している。東海岸では、広田遺跡、島ノ家遺跡等の埋葬遺跡が発見されている。

2. 調査の経過

遺跡が発見されたのは昭和42年春である。

遺跡は、西之表市西之表9989小字納曾にある。地主の上妻紀夫氏が、昭和41年加世田農業高校校長を退職後、郷里に帰られ、畑地の耕作にあたっておられた時、土器、石器が多量出土するのに気付かれ、耕作を中止された。今にして思えば適切な処置であった。

昭和47年8月、西之表市上能野貝塚の調査にあっていた河口貞徳氏、上村俊雄が、西之表市博物館の飯島安豊氏の案内で現地を調査し、市来式を主体とする遺跡であることを確認した。その折、上妻紀夫氏より発掘調査の要望がなされたが機会を得なかった。昭和48年12月鹿児島市吉野町七社遺跡の発掘調査が行われた折、納曾遺跡の発掘調査を計画しようという話がきっかけとなって、昭和49年3月24日から4月4日までの第一次調査が実施された。第一次調査は、鹿児島大学考古学研究会が旅費を自己負担し、他は上村俊雄が全額拠出する自費発掘調査であったが、西之表市教育委員会社会教育課、博物館、耕地課、土木課、会計課等から発掘調査に必要な諸道具類、納曾部落関係者からは宿舎として公民館を提供して頂いた。

第2次調査は、昭和50年3月22日より3月29日まで行われたが、地主の上妻紀夫氏がフェニックス、ヤシ等の樹木を移植した際、土器及び柱穴らしきものを発見されたことが第2次調査のきっかけとなった。第2次調査は、西之表市が上村に委託し、発掘主体となって予算を計上したが、不足分は上村が拠出した。第一次、第二次調査にわたって、地元関係者より宿舎の提供、さし入れ、激励などをうけた。とくに地主の上妻紀夫氏御夫妻には物心両面にわたってなみなみならぬ御協力があったことを特筆し、地元関係者の皆様方に誌上をかりて謝意を表したい。

3. 調査団（第一次は省略）

調査責任者 上村俊雄（ラ・サール学園教諭） 調査員 本田道輝（加世田女子高教諭）

調査補助員 旭慶男、平島勇夫、多々良友博、村岡隆夫、森寿和子、東橋子、有川民子

（以上鹿児島大学考古学研究会）

旭慶子（国立鹿児島病院附属高等看護学院2年）

野元吉二、執行直（ラ・サール中学2年）

内村幸江、田中茂子、花木否代子、春田千代子（種子島実業高校2年）

大迫文敏（加世田高校2年）

関一之（種子島高校2年）

山田ひとみ（種子島実業高校卒業生）

地元関係協力者

河東 敏（西之表市博物館長）

樋口兼一（文化係長）

飯島安豊（博物館主事）

上妻紀夫（地主）

八坂康成（西之表市納普公民館長）

川崎晃彦（榕城中教諭）

Ⅱ 遺跡・遺物の調査

1. 遺跡総説

納普遺跡は西之表港に往く甲女川の北岸、西之表市の市街地を見下す海岸段丘上にある。遺跡地の標高22.67mである。種子島はふつう三段の段丘があるといわれている。その第一番目の海岸段丘上の東端にあり、眼下に甲女川と西之表港を目下ろし、前方にマムシと鹿で有名な馬毛島が見渡せる。日当たりも良く、海からの風が直接あたる地点に位置する。遺跡は西之表市西之表9989、小字納普（地主上妻紀夫氏）にある。フェニックス、ワシントンニア、カナリーヤシ、カラタネオガタマ、クマタケラン、月桃にかこまれた畑地で、大根、玉ネギ、ニンジン等が植えられていた。地主上妻紀夫氏の好意により、これらが移植され、発掘調査が順調にはかどった。崖端にはアオノクマタケランが防風林として植えられており、海岸に向かって急崖をなしている。第一次調査では、崖端に近い部分に遺構が発見されたが、クマタケラン、月桃が防風林および崖崩れを防ぐ役目を果たしているところから、遺構の8割方の調査したのみで残り2割は調査を断念せざるを得なかった。最も肝要と思われる部分の調査がなされていないために遺跡の全貌を明確にし得なかったのは誠に残念であった。この遺構は、4m×6mの細長い形態を示し、東から西へ向って傾斜しており、中央に浅い溝状の遺構がある。傾斜の末端に近づくほど、木炭、焼土がめだち、土器にはススが多量にこびりついていた。傾斜はゆるやかであるが、風当りの強い崖端に位置している。今の所、炉址としての可能性が非常に濃厚である。土器は市来式を主体に、すり消縄文系統の土器、無文直口緑土器、乳房状尖底土器がある。石器では、叩石、石錘、磨石、石斧などが出土しているが、その中でも叩石の出土量がめだちが多かった。

第2次調査では、竪穴式住居址と平地式住居址が確認された。種子島において縄文時代後期の竪穴式住居址、平地式住居址、炉址が発見されたことははじめての例であり、考古学史上、重要

な発見の一つとなった。また土器については、主体となる深鉢形土器において、器形と文様の点で西平式の影響を強く受けながらも、独自の文化を展開していったと思われる納骨遺跡出土の土器を独立一形式としてとらえ、納骨式土器とよぶことにしたい。

Ⅱ 第二次調査

1. 遺 構

第一次調査の際設定したA～Eトレンチをさらに東に18m延長し、2m巾でF～Nトレンチを設け、又南から北へ同じく2m巾でI～V区とした。今回はI～LトレンチⅡ～Ⅴ区、M・NトレンチⅣ・Ⅴ区の計80㎡を発掘し、さらにE～LトレンチのⅢ区南側壁面に沿って1m巾で層位確認の為にトレンチを設けた。最初にJ～NトレンチⅣ・Ⅴ区10m×4mの区域を調査したが、J～NトレンチⅤ区さらにM・NトレンチⅣ区はフェニックスを移植した際に破壊されており、明確な遺物包含層の確認は困難であった。LトレンチⅣ・Ⅴ区の破壊部もフェニックス移植の際にほり込まれたものであるが、このほりこみの中から2個のピット(柱穴)が検出された。第1層の耕作土をはいだ段階でJトレンチⅡ・Ⅲ区、KトレンチⅢ・Ⅳ区において土器群が検出され、この土器群の広がりを見るためにさらに西側へ2m×3m(IトレンチⅡ～Ⅴ区)拡張した。土器群は、IトレンチⅡ区、JトレンチⅡ・Ⅲ・Ⅳ区、KトレンチⅢ・Ⅳ区に偏在しているが、これらの部分は、土がしまっていて非常に固く、攪乱も見られないところから縄文後期(納骨式)の平地式住居址とみてよいものと思われる。遺物をとりあげた段階でピット、さらにLトレンチⅢ～Ⅳ区にかけて段落ちが確認された。ピットについては、不明確なものを除き18個を確認した。LトレンチⅢ・Ⅳ区における段落ちは、南から北へかけて約10～20°の傾斜をもって落ち込んでいるが、北半分はフェニックス移植のほりこみのために途中で切られており、全形を明らかにすることは困難であったが、落ちこみの中からピットが検出された。この落ちこみは、竪穴式住居址(一溝式)である。

2. 遺 物

遺物については、縄文式土器の他、IトレンチⅢ区の北東部において完形の石皿、IトレンチⅢ区において砥石が出土している。その他にも大小の角礫が多量に出土しているが石器と思われるものは非常に少ない。

イ 石 器

叩石、石斧、石錘、石臼状石器、磨石、砥石、石皿等がある。そのうち叩石と磨石が大部であるが、今回は第一次調査で見られなかった石皿が出土している。第一次調査で出土した石はほとんど石器であったが、第二次調査では、石器の量は少なく、大部分が自然石であった。

ロ 土 器

出土土器は3類に大別できる。

○第一類土器

第二次調査出土土器中主体をなすもので、出土量は多い。器形は深鉢形と浅鉢形が認められる。器面には貝殻炭灰はまったく施されず、中には器面がやや研磨されている状態を示すものもある。

深鉢形土器

(I)

口縁部分をやや肥厚させ、そこに乱れた数条の平行沈線文、沈線による山形の文様、貝殻文、刺突連点文等を施す。口唇部は平坦なものが多く、通常1条沈線を施している。山形口縁のものと同様のものがあり、山形口縁のものでは項部をおさえて凹をつける。胴部には横に連続する刺突文を施し、その下位に口縁部同様乱れた平行沈線文、沈線による山形や菱形の文様を施すもの、さらにその沈線間に連点文や貝殻文を施すもの等がみられる。器形は一般に単純な深鉢形を示すが、頸部より口縁部へかけて強く外へ張り出す器形を示すものもみられる。底部は平底である。これらの土器は、西平式と密接な関係にある。

(II)

器形、文様共に基本的には(D)と大差ないが(D)に見られたような西平的な器形のものが見られないこと、口縁部肥厚帯下にまでやや平行沈線がはみだしてしまうもの、口縁部肥厚帯が明瞭でなかったり、あるいはまったく肥厚帯がないものが認められること、胴部から刺突連点文が消失してしまうこと等(I)との間に一連の変化が認められる土器である。

(III)

器形、文様共に(I)・(II)を踏襲するものであるが、口縁部肥厚帯下に文様はあふれ、頸部にも沈線文や細刺突文、貝殻文等が施文されるもので、むしろ肥厚帯下に文様の主体があるものまで認められる。肥厚帯が消失してしまったものについても同様のことがいえる。これらは(III)に文様の更に変化したものといえることができる。

浅鉢形土器

浅鉢あるいは皿形の器形を示す土器が今回の調査で8点出土している。

文様は口縁部をやや肥厚させてそこに2条平行沈線を施したのもみられるが、むしろ主体となるのは口縁部表面のようで、沈線文と貝殻文、沈線文と刺突連点文、沈線文等の文様が見られる。第一類浅鉢形(皿形)土器は脚台付きの土器であろう。かつてやしの木が移植された際発見された脚台は、赤色塗料の痕跡が認められる。

以上第一類土器としてあげてきたものは、その初期において西平文化の影響を強く受けながらも、しだいに独自の文化へと展開していったと考えられ、独立一形式としてとらえるのが妥当と思われる。本遺跡の立地する宇名より、この第一類土器を納骨式とよぶことにしたい。

○第二類土器

西平式土器である。出土量は少ない。従来西平式は市来式に伴って少量出土する例が多く、これまでの調査では、鹿児島市若宮神社遺跡、曾於郡志布志町片野洞穴遺跡2例で、西平式を主に市来式を少量伴出する出土状況を示している。注目すべきは本遺跡では納骨式が逆にこの

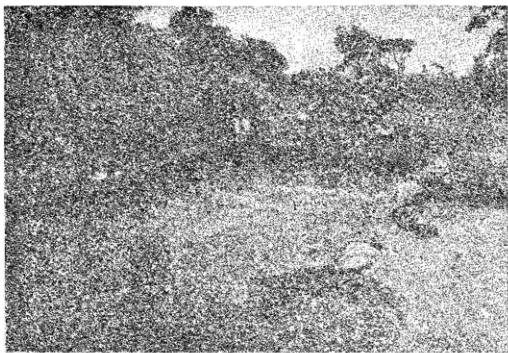
西平式を少量伴出している点である。

○第三類土器

一渙式土器である。南島系土器で本土ではその出土を見ない。出土量は西平式土器よりもさらに少ない。従来の調査では、一渙式は市来式との共存関係が確認されているが、本遺跡では市来式出土遺構からは出土せず、むしろ西平式及び納曾式と共存するという、新しい事実が判明した。

以上述べてきたように、納曾遺跡は南九州縄文後期文化の様相を考える上で非常に貴重な遺跡といえることができる。最後に土器論については、本田道郎氏の手を煩わせた。

(ラ・サール学園教諭 上村俊雄)



遺物出土状況と竪穴住居址



平地式住居址と竪穴式住居址
(柱穴に囲まれた部分)

